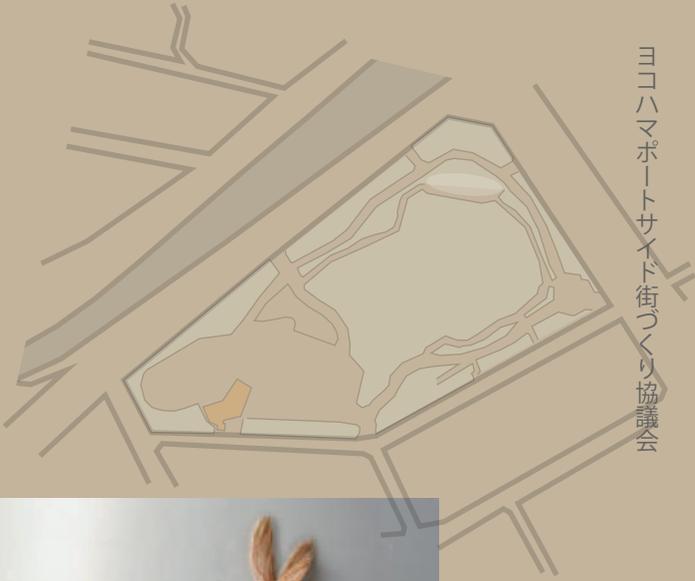


ヨコハマポートサイド街づくり協議会



a historical point of view

神奈川宿からポートサイド地区への歴史パノラマ

U M I K A Z E
YOKOHAMA PORTSIDE

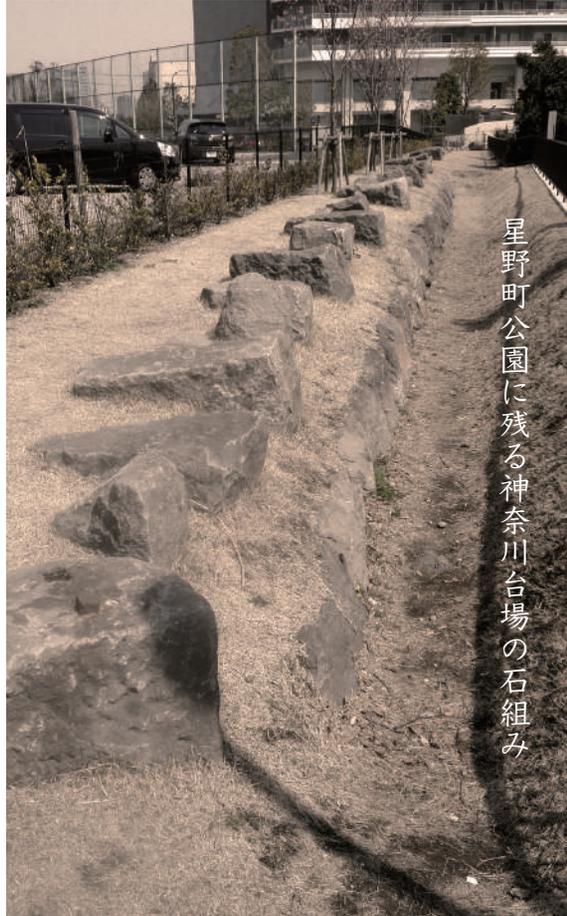
うみかぜ

晴れた日には ちょっと散歩で 江戸、明治、大正の 空気に触れる

葛飾北斎の名作「神奈川沖浪裏」は神奈川宿沖の海を題材に描かれた作品です。ヨコハマポートサイド地区は、当時、その神奈川宿に隣接する景勝地であり、将軍、諸大名、公家の指定宿舎「本陣」も近く、開港後は海援隊士であった白峰駿馬によって、日本初の民間造船所「白峯造船所」が開設されるなど、それぞれの時代に「その人有り」といわれた人々の足跡が刻まれたてきた場所でもあります。多くの史跡はヨコハマポートサイド地区の外になりますが、いずれも「歩いていける範囲」です。市役所や区役所によって、解説のプレート（説明板）が整備されているところもたくさんありますので、歴史をたずねての散策など、お勧めします。

幸ヶ谷歩道橋の脇にある
本陣跡についての解説プレート





うみかぜ
2017

目次

- 震災復興と神奈川公園／神奈川会館 3／4ページ
- 古の神奈川宿 5／6ページ
- 神奈川台場／青木橋 7／8ページ
- 宮川香山と真葛焼 9／10ページ

震災復興

と神奈川公園

大正12年9月1日、この街を関東大震災が襲いました。
マグニチュード7.9。相模湾を震源とするこの大震災は、東京よりも震源に近かった横浜での揺れが大きく、現在のポートサイド地区あたりにも甚大な被害がもたらされました。

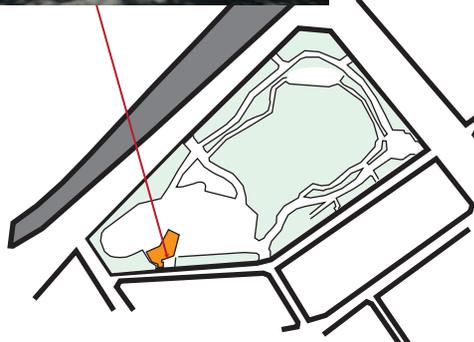
神奈川公園（及び神奈川会館）は、その震災復興計画の一環として描かれたもの。震災の火災被害への反省から、官庁街と、公園と遊歩道とを組み合わせた緑地ネットワークを都心部につくっていかうとする、その北部の拠点として考えられたものでした。

昭和2年には工事が開始され、震災瓦礫等で埋め立てを補強してから、その上で樹木を植樹し、中央にはヨーロッパ風の噴水のある池が設けられました。

昭和5（1930）年、開園当時の神奈川公園



幸ヶ谷集会所



現在の神奈川公園

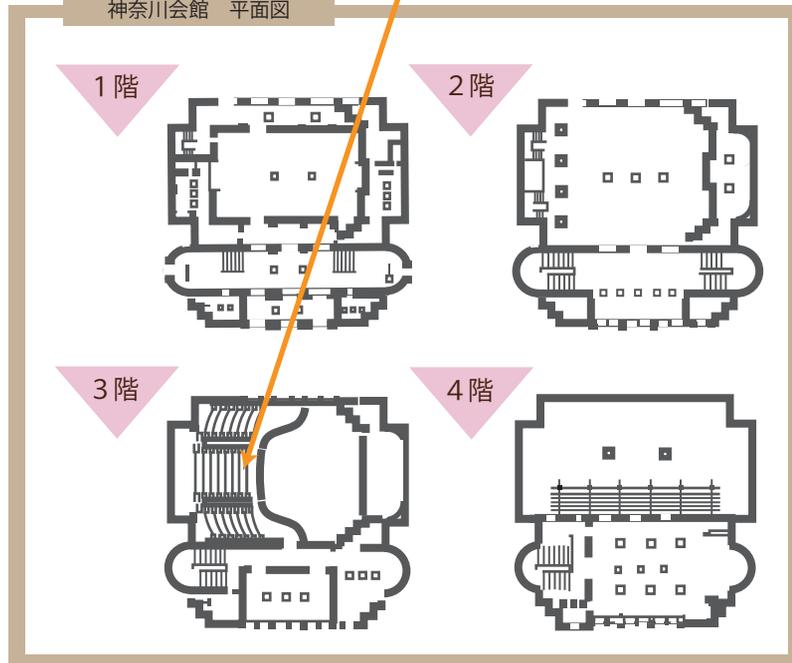


1980（昭和55）年頃の神奈川会館



神奈川会館 平面図

神奈川会館の様子をとらえた写真は幸ヶ谷集集会所運営委員会のご好意により
横浜市立神奈川図書館が原盤を所蔵する写真をお借りして掲載したものです。



公園と同じ1930（昭和5）年に完成したのが神奈川会館です。鉄筋コンクリート4階建て。集会室やホールがあり、当時、一般的になりつつあったクラシック音楽のコンサートなども行われていたようです。会館内には、食堂もあり、当時の人気メニューだったカレーやカツカツなどを食べることができ、ホール以上に人気のスポットだったようです。そうしたことから、昭和恐慌という不況期にも関わらず住民にとっても「自慢の場所」になっていたようです。

神奈川会館

東海道神奈川宿

江戸幕府は、東海道の各宿場の最も「江戸寄り」の端に番所を設けて、それを「江戸見附」といい、同様に最も関西方面（上方）に近い場所にも番所を置いて、これを「上方見附」と呼びこの間を公式な「宿場」としました。
 神奈川宿の場合、江戸見附は現在の京急・神奈川新町駅近くに。上方目付は、今の台町（神奈川台関門跡の石碑があるあたり）にあったそうで、つまり、この「見附から見附まで」が、幕府が認めた公式な「神奈川宿」だったようです。

江戸見附、上方見附を宿場の両端だとすると、中央を滝野川が流れている構図になります。そうしたことから宿場の差配も、滝野川を中心に江戸見附側（当時の呼称で神奈川町）と上方見附側（同じく青木町）に分かれていたようで、大名や公家が宿泊するオフィシャルな宿＝本陣も、それぞれの町に一ヶ所ずつあり、いずれも、世襲の家がこれを守っていたようです。

台町の旧・東海道から高島台へと登る急な坂道の入り口に、神奈川台関門跡の石碑があります。幕末、攘夷運動による外国人襲撃事件が多発。各国領事館などが置かれていた神奈川宿のセキュリティを高めるために設置された関門の跡です。



神奈川台関門跡

台町の旧・東海道

広重の東海道五十三次「神奈川宿」に描かれたのは、このあたりの風情だったようですが、決して、中心街を描いたわけではなかったものではありませんでした。しかし、宿場に入る旅人を一刻も早くつかまえたかったのか、旅館や茶屋が集積したのは、むしろ両方の見附付近だったようです。

宮前商店街（青木町）
 旧・東海道の原形が確認できるのは宮前商店街と台町あたりだけ。



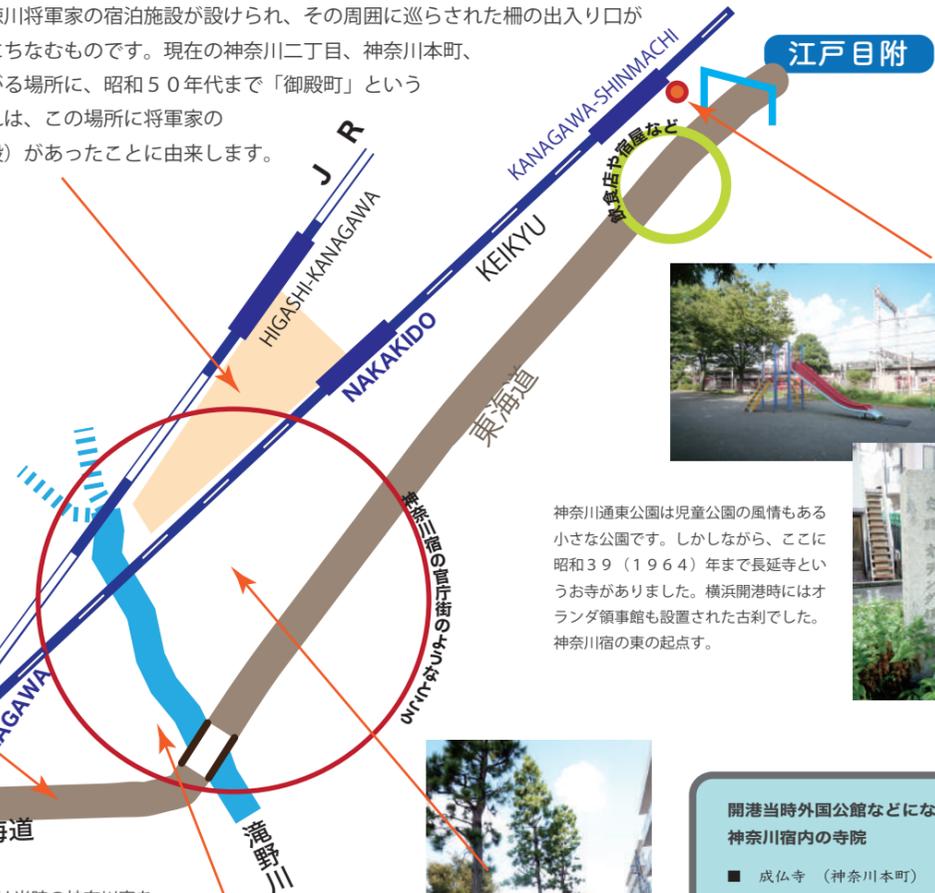
滝野川は当時の神奈川宿を二分するように流れていたわけですが、この川を渡るため、当時の東海道に架けられていた「滝の橋」は、今も同じ位置にあります。近くには幕府の法度や掟を庶民に徹底するために設けられた「高札場」もあったそうです。



滝の橋近くの「神奈川宿歴史の道」案内板 ↑

仲木戸／御殿町

明治38（1905）年、当初は中木戸駅の名称で開業した京急・仲木戸駅。この名称は江戸時代初期、ここに徳川將軍家の宿泊施設が設けられ、その周囲に巡らされた柵の出入り口がこの辺りにあったことにちなむものです。現在の神奈川二丁目、神奈川本町、東神奈川一丁目にまたがる場所に、昭和50年代まで「御殿町」という町名もありました。これは、この場所に將軍家の「御殿」（陣屋：宿泊施設）があったことに由来します。



神奈川道東公園

神奈川道東公園は児童公園の風情もある小さな公園です。しかしながら、ここに昭和39（1964）年まで長延寺というお寺がありました。横浜開港時にはオランダ領事館も設置された古刹でした。神奈川宿の東の起点です。

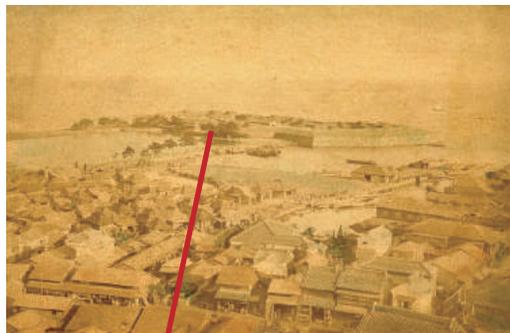


徳川家康から寺領を拝領したという金蔵院（旧・御殿町／東神奈川1丁目）から成仏寺（神奈川本町）を結ぶ道には松並木が再現されています。

開港当時外国公館などになった神奈川宿内の寺院

- 成仏寺（神奈川本町）
アメリカ人宣教師宿舎
- 慶雲寺（神奈川本町）
フランス領事館
- 浄流寺（幸ヶ谷）
イギリス領事館
- 宗興寺（幸ヶ谷）
宣教師ヘボンが診療所を開所
- 甚行寺（青木町）
フランス公使館
- 本覚寺（高島台）
アメリカ領事館
- 長延寺（区画整理によって転出）
オランダ領事館

神奈川台場

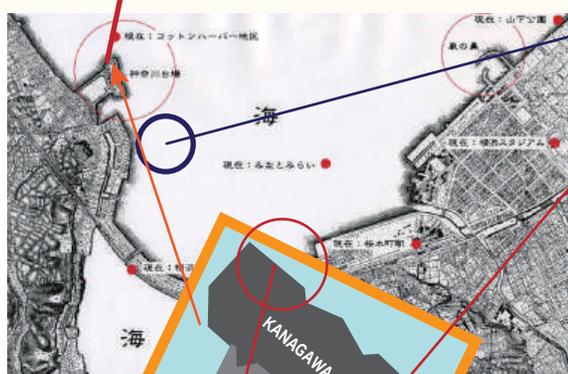


← 明治初頭の神奈川台場を写した着色写真。

外国人向けの土産物としてつくられたものの1枚ではないかと考えられています。

この写真は、カリフォルニア州の古写真店からインターネットオークションに出品されていたものを、宮川香山 眞葛ミュージアム館長 山本博士さんが発見し購入されたものです。後に横浜開港資料館によって、神奈川台場を写した着色写真としては最古のものであることが確認されました。

↓ 明治5年 鉄道開業前後の横浜都心部の地図



□ ヨコハマポートサイド地区はこのあたりでしょうか

■ 神奈川台場公園

神奈川台場は東西2本の「取渡り道（とわたりみち）」で陸地と結ばれていました。現在の神奈川台場公園は、その西取渡り道遺構上に位置し、その遺構の直上に当時の石と同じ産地、同じ規格の石組みを再現。再整備されたものです（平成22年3月）。

所在地：神奈川県神奈川区神奈川1丁目
JR 東神奈川 / 京急仲木戸駅から徒歩 10分ほど

■ 星野町公園

神奈川台場公園同様、平成22年3月、神奈川台場の石積みが見渡せるよう拡張整備された公園です。公園脇に神奈川台場の石積みが確認できます。

所在地：神奈川県神奈川区星野町
JR 東神奈川 / 京急仲木戸駅から徒歩 15分ほど



神奈川台場は、横浜開港ともに港や外国人居留地を守備する目的で造られた砲台です（安政7年；1860年完成）。

設計は勝海舟、築造には伊予松山藩があたりました。14門の大砲が据え付けられていましたが、実戦に用いられたことはなく、もっぱら祝砲、礼砲用に用いられていました。



神奈川台場公園

外国人居留地が廃止された明治32年、神奈川台場はその役目を終え、その後埋め立てられて地続きとなり、永い眠りについていました。

青木橋 誕生秘話

下の古写真は明治3（1871）年に、当時の横浜開港地で発行されていた外国人向け写真情報誌「ファー・イースト」に掲載されていた、現在の青木橋あたりの掘削工事の様子を現在の幸ヶ谷公園あたりから撮影した写真です。写真奥の右手に広がる海面は、現在の横浜駅西口方面、中央に伸びる土盛りの左手側が東口あたりということになります。



青木橋は掘削工事によって分断された東海道をつなぎ直すために架橋された橋でした。



幸ヶ谷公園から撮影した現在の様子

宮川香山と真葛焼

当時、欧州で“魔術師”と評された初代宮川香山 彼が創始した横浜オリジナルの陶磁器“真葛焼”

真葛焼（まくずやき）は、明治の初年、初代宮川香山によって創始された横浜オリジナルの陶磁器です。当時、日本の工芸品は、例えば、倉敷の錦莞苳（きんかんえん／花ござ）がそうだったように、海外、特にヨーロッパで高い評価を得ており、わが国の重要な輸出品でした。そうした経緯から、当時、わが国を代表する貿易港であった横浜港近くには、当時、さまざまなジャンルの名工たちが集まっていました。



初代香山は天保13年、京都真葛原に名高い陶工であった宮川長造の四男として生まれ、幕府の御所献納品の作陶を依頼されるなど維新前から高名な作陶家になっていました。その初代香山が開港の地横浜にやってきたのは、明治3年彼が29歳のときでした。

横浜での作陶には並々ならぬ苦労があったようですが、明治9年にはフィラデルフィアで行なわれた万国博覧会で、翌年の第1回内国勸業博覧会に作品を出品しいわゆる超絶技巧な作風でそれぞれに賞を受賞して地位を確立。その後も海外の博覧会にたびたび作品を出品し、その度に好評を得て受賞作を連発し、欧米の専門家たちを驚愕させ、国際的な地位を確立しています。

明治15年頃からデコラティブな作品よりも、オーソドックスなやきものづくりへと作風を変えていきますが、中国陶磁器などから釉薬、釉法などを研究し、真葛焼を見事に陶器から磁器へと転換させていきました。明治29年には、帝室技芸員に選任され、押しも押されぬ、わが国を代表する名工として歴史に記憶される存在になっていきます。



眞葛焼と土

貿易の一大拠点ではあった横浜も、作陶に適した土に恵まれていたわけではありません。
初代宮川香山も関東一円に「土」を求めて旅をしており、彼の窯があった南太田（庚台）と伊豆の土をブレンドして用いていますし、釉の材料になる木灰も、あちこちの木を切ってきては焼いたと伝えられています。
後年の記録には、尾州石や多治見の長石を取り寄せたともありますから「土」についてはずっと苦労を重ね、また創意工夫を重ねていたようです。



窯場跡から出土した陶片の展示 (宮川香山 眞葛ミュージアム)

幻となった眞葛焼

二代目として香山の名跡を継いだのは初代香山の兄の子で初代の養子となっていた半之助。彼も明治21年、家督を譲られるとシカゴ、パリ万博に参加するなどグローバルに活躍する一方、国内需要の掘り起こしなどにも尽力し、企業向けのノベルティ制作に乗り出すなど、精力的に活動していきます。しかしながら、関東大震災から昭和恐慌、太平洋戦争へと繋がる波乱の時代の中で、眞葛焼は苦難の時代を迎え、昭和15年、半之助の長男葛之助が三代目香山を継ぎますが、昭和20（1945）年5月の横浜大空襲で、三代目香山とその家族、従業員までもが落命、工房も焼失、今日に至るまで正式には再興がかなわずにいます。

宮川香山

眞葛ミュージアム

神奈川県栄町6-1
ヨコハマポートサイド
ロア参番館1階-2
管理・運営 株式会社 三陽物産

土曜日、日曜日のみ開館
(年末年始など休館日あり)
午前10時～午後4時まで

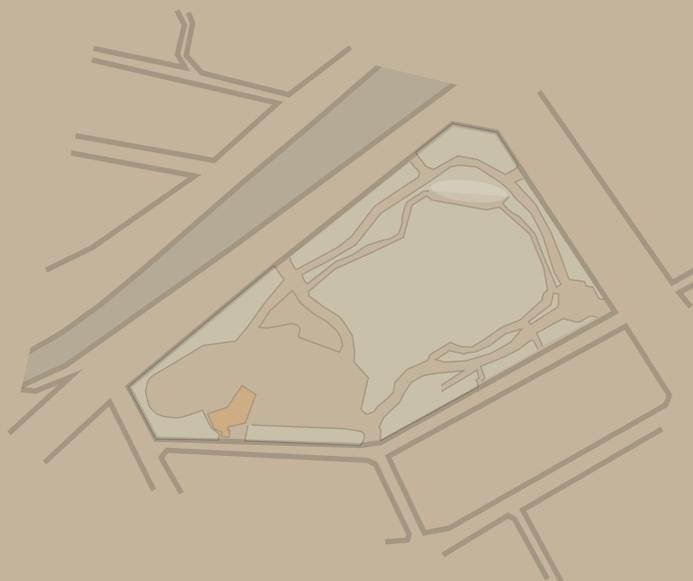


詳しくは眞葛ミュージアム HP で <http://kozan-makuzu.com/>

YOKOHAMA PORTSIDE
COMMUNITY Little PRESS

うみかぜ

2017 MAY



ヨコハマポートサイド街づくり協議会

株式会社 大塚商会
株式会社 加藤美蜂園本舗
株式会社 K T グループ
菱重プロパティーズ 株式会社
京急開発 株式会社
中外倉庫運輸 株式会社
独立行政法人 都市再生機構
ソフトバンク 株式会社
東電不動産 株式会社
菱重ファシリティ&プロパティーズ 株式会社
三菱倉庫 株式会社
三菱地所投資顧問 株式会社
公益財団法人横浜市建築助成公社
横浜市住宅供給公社
三井不動産ビルマネジメント 株式会社
横浜市

YOKOHAMAPORTSIDE